

横浜歌人会 会報 124*

横浜歌人会会報 第124号

目次

●特集 暮らす町角—わが町について

- * 02 数々の町…桜井健司
- * 03 河川敷の記憶…岩内敏行／赤羽というと…高橋千恵
- * 04 さらば坂本小学校よ！…福島泰樹
- * 05 石神井に戻って来て 10 年…正古誠子／蛇崩川緑道…田村 元
- * 06 林試の森公園…間 ルリ／「世に無き時間」を思う…鯨井可菜子
- * 07 多摩川の渡し守のものがたり—大田区下丸子…松平盟子／探せば、見つかる…大橋 弘
- * 08 坂のある町…ユキノ進
- * 09 蟹ヶ谷の老齡者住宅模様…津波古勝子／わが町みずが丘…中川宏子
- * 10 都会で田舎で…渡部洋児／自分達の町…桜井健司
- * 11 アカシア、ハクウンボク花の町…鹿取未放／私のまほろば…小林 勝
- * 12 私の作歌姿勢…林 静峰／菊名池…山本登志枝
- * 13 まぼろしの川…時本和子
- * 14 縄文人を偲べる町…中村規子／東急東横線の街～綱島・日吉～…宮下俊博
- * 15 老人の街…橋本千恵子／六角橋は大学の町…伊藤美枝
- * 16 私の暮らす南林間…半澤敏子
- * 17 湘南ではないけれど…大沢優子／野原の記憶…古谷 円
- * 18 補足資料 暮らす町の歴史…高橋みずほ
- * 20 編集後記

●特集 暮らす町角 ―わが町について

数々の町

桜井健司

どの町にも、その土地特有の文化がある。人が集まり、やがて町となり、そこに生活時間が流れ、居住する人達が生み出す文化が形成されていく。人が町を作り、やがて町が人を作ると言えようか。イメージしやすいところでは、京都であれば伝統を重んじた公家の文化があり、大阪には合理性に富んだ商人の気風があり、東京には、行政の拠点として発展してきた歴史がある。更に、ある程度の規模の都市であれば、洗練された商業施設や静かな住宅街を擁する街区、人のパワーやエネルギーを感じさせるカジュアルなエリアもある。そんな町を歩くのも、また楽しい。

さて、横浜と聞けば、多くの人は、「港」「異国情緒」「ハイクラ」といったキーワードを真っ先に思い浮かべるのではないだろうか。歴史的建造物や港を中心としたエキゾチックな町並みは、中区、西区を中心としたエリアに多く存在する。その辺りが、多くの人のイメージする「横浜発祥の地」と言えようか。一方で、実際の横浜市そのものは神奈川県面積の約四分の一を有する広大な行政区であることから、横浜市全体からすれば、当然のことながら必ずしもそのイメージだけで括られるものではない。一八八九年に市政が施行されて以降、市域の面積は順次拡張を続け、現在の姿となった。そ

の結果、広域を有する横浜市内には「多くの横浜の町」が存在している。

大雑把な括りであるが、横浜には大きく分けて、「海の横浜」「緑の横浜」、この二つが存在していると思う。「海の横浜」は、港を有し海に面した地域（市の東側エリア）、「緑の横浜」は、なだらかな丘陵が連なり、住宅地や田畑を多く有する地域（主に市の西側、中央、南側エリア）である。前者は、臨海部に港や工業地帯を擁していることから貿易、工業の町として発展してきた先進の文化がある。後者は、谷戸の風景を随所に残している内陸の地形に、人と自然とが共存してきた歴史がある。

今、横浜を大きく二つに分けてみたが、この対になったエリアの中にも、更に様々な歴史を有する町の文化があるだろう。「海の横浜」にしても、東京寄りの地域と、横須賀市に隣接した地域とでは違った時間が流れているかもしれない。

「緑の横浜」にしても、町田市に隣接した地域と県央に近い地域とでは異なっているかもしれない。横浜市は、その市域が極めて広いゆえに、より一層多くの地域文化が確認できるのではないだろうか。更に横浜以外の町はどうだろうか。そこらもまた興味深い。三者三様、いずれも住んでいるからこそ感じられる、その町固有の空気があるに違いない。

横浜はあらゆる文化や風物を受け容れてきた。多様性に富んだ「横浜市内にある横浜の町」を始めとして数々の町を誌面の中で訪れ、散策してみたい。

河川敷の記憶

岩内敏行

埼玉県川口市飯塚。この住所になって十三年になる。長女が生まれた年にマンションを購入してから住みづづいているこの町は居心地がいい。お気に入り荒川河川敷。徒歩五分で着く。この河川敷の近さがこの町に暮らす決め手となった。休日にジョギングするのも河川敷、保育園時代の長女と夕方に散歩をしたのも河川敷、小学生時代には持久走大会の練習につきあったのも河川敷だった。元旦の凧揚げも河川敷だ。

瞬間に風はあらわれたかくのる鳥のかたちの風あおぎいる 「りとむ」二十一年三月号

私の生活に欠かせないこの河川敷が令和元年の十月十二日の台風十九号では水に沈んでしまった。ぎりぎりのところで決壊はまぬがれたものの、台風が去って家族で見に行ったとき、記憶の中の河川敷はすべて濁流の中にあった。あの時、小学三年生だった長女がその風景を実にかなしい表情で見つめる写真に、いまでも胸があつくなる。それほど我が家に親しい場所なのだ。台風のとくからいから私はゴルフを再度はじめた。この河川敷には市営のゴルフ場が併設されている。とても良いコースで、しかも我が家は徒歩圏ということもあって、「羨ましい」と言われることが多い。

川口市浮間ゴルフ場9ホールの芝からの熱まず一歩踏む 角川「短歌」二十三年十月号

今年の夏は暑かった。プレーするのは大抵夕方をハーフでまわる。手引きカートで歩いてまわるが、芝

がたつぷり夏の熱を吸収し、踏むたびに熱が跳ね上がるようだった。早々に汗は噴き出すし、自分が焦げているのがわかった。家族にポッキーのようだ焼けた身を見て言われた。最近では学生時代の友人たちにここまできてもらってハーフプレーをし、そのまま近所の焼き鶏屋で第2ラウンド。ウイスキーをボトルでたのみ、一杯目は目が覚めるほどのロックをあおるのが常。

〈反省〉ということにして盛りあがる水を崩す ジャックダニエル 角川「短歌」二十二年六月号

さて、河川敷のことをかいたが私には夢がある。このゴルフ場で長女とゴルフをすることだ。あの台風十九号でかなしく河川敷を見つめた長女と、笑いながら。そしていっしょに飲みたいなあ。いずれ、きっと。

赤羽というと

高橋千恵

今年の五月、東京都北区に引っ越した。エリアと言うと赤羽である。赤羽という呑兵衛さんの街というイメージがあるが（ほぼそうなのだが）私の住まいは赤羽駅から少し離れた住宅街なので自身では遊びに行く場所と生活をする場所と分けて暮らしている。

街角のピアノは今日も弾みおり信号待ちに聴く ラ・カンパネラ

赤羽駅東口からララガーデンという商店街へと向かう途中のスクランブル交差点の前にあるビルの一階にストリートピアノが置かれていて、いつも誰かしら演

奏をしている。クラシックや時々コテコテの演歌なんかも聴こえてきて誰そ彼時だと郷愁に誘われる日もあり、ともかく信号待ちの楽しみのひとつになっている。ちなみにフラガーデンには〈美声堂〉という演歌・歌謡曲の品揃えに定評のあるミュージックショップがある。

荒ぶらぬ川を見に行く週末は缶を一片手に持つて

欄干に両肘つけて対面す川面に尾びれを落とす夕陽と

満月の夜に来てみたし夏草に〈月を射る〉というオブリジェ立ちおり

週末になるとよく荒川を見に行く。近くには地元の人から赤水門と呼ばれ、かつては荒川の氾濫から人々の暮らしを守っていた水門がある。その橋を渡る時、下流を見ると現在、活躍している青い水門がある。そして橋を渡ると小さな島のような場所があり、天に向かって矢を射るようなカタチのオブジェ〈月を射る〉が立っている。そのオブジェをぜひ月の浮かぶ夜に見てみたいが、ひとの気配の無いところに一人で行く勇氣は無いので夕陽がまだ健在の時間までは川沿いを散歩したり、穏やかな表情の荒川をなんにも考えずに眺めたりしている。

私の住まいは東京メトロ南北線の駅にも近いので実は横浜まで乗り換えなし！の一本で繋がっている。と引越してから南北線に乗りつつ気が付いた。これまでは好きなアーティストのコンサートは東京ドームもしくは、さいたまスーパーアリーナを選んでいたのだがこれからは新横浜駅も近い？ので横浜アリーナにも行ける！推し活の行動範囲も広くなりそうだ。

さらば坂本小学校よ！

福島泰樹

本籍地は、東京都台東区入谷百十番地。私が生まれた昭和十八年三月当時は、東京市下谷區入谷であった。誕生の日が六十七日後に、「東京市」は廃止され「東京都」制が公布されている。したがって私は、最後の東京市民としてこの世に生を受けたのである。東京府下生まれの東京人、中井英夫や、小沢昭一は東京市十五區内「御府内」生まれと私を羨んだ。

あたりは一面焼野原であった。関東大震災から東京大空襲までわずかに二十一年六ヶ月、再び入谷一帯は灰燼に帰したのである。戦後、下谷區と浅草區が合併、台東区となった。

焼野原にバラックが建ち町は復興した。昭和二十四年四月、私は台東区立坂本小学校に入学した。入学式の記念写真を見ると、靴を履いている子は数人、継ぎ

接ぎだらけの坊主頭とおかつば頭が、整列している。

昭和二十年三月十日の東京大空襲は、浅草區を焼き払い、炎は下谷區を舐め尽くした。しかし坂本の一部と根岸は延焼をまぬがれた。私の通学路には、関東大震災後築の「鶯谷アパート」、瀟洒な五軒長屋の格子戸が立ち並んでいた。言問通りに出れば、安政年間創業の居酒屋「鍵屋」に隣接する文具屋なども江戸期の町家造りで、床は土間のままであった。電車通り（日光裏街道）を渡ると通りには、江戸、明治、大正築の町家が軒を連ね、路地に入れば長屋が向い合っていた。

遊び場はいたるところにあった。焼跡の土を掘る宝探し、釘さし。路地ではベীগマ、メンコ、通りではゴロベース、S陣に興じ、倉庫に忍び込んでターザンごっこに熱中した。空はやたらに青く、陽はさんさんと降り注ぎ、家々の窓からは誇らしく、五球スーパージオの大音響が流れていた。

昭和三十年三月、坂本小学校卒業式にはわんわん泣いた。あれから六十八年。福田先生も久保田先生も疾うに亡く、上木君や野原さんも若く死んでいった。鶯谷アパートも長屋も雜貨屋も乾物屋も、路地のことごとくが消えマンションになってしまった。関東大震災百年を前に、大正十四年竣工の国策復興小学校の母校も昨春、取り壊されてしまった。東京大空襲から人々を救い、二千人もの人々が居住していた。

壊すなど私は叫んだ！建物には人々の記憶が滲んでいる。解体前夜、私は卒業生を代表して懐かしの講堂で中原中也「別離」を絶叫し、校歌を唱った。

熱い息を手にかきかけて雪の朝を 登校をする
ヤッサンが見ゆ
齒は母の骨であつたかこの指は母の肉だろ 息か
けてやる

小学校の窓は見てきた戦争を 貧しくも生きる人の姿を
そんなことをしたら心が可哀相 教えてくれた滝
沢先生

幼い父 幼い母や祖父、祖母の壁に滲んで滴りや
まず
建物が無くなることは父母の記憶が消える、ぼく
も消えてく

記憶を蔑ろにしてきた戦後、日本人！ 原爆さえ
も揉み消してきた
ほら此処が音楽室だ みな眸燃やし唱った、故郷
の空

坂本小学校の便所の鏡に映りたる 老いし六年二
組の俺よ
ライトバルーンに泛ぶ校舎よ 人々の記憶よ夢



> 1 荒川と隅田川とを仕切る岩淵水門（青水門）（東京都北区）



> 2 旧坂本小学校跡地暫定広場（奥は入谷鬼子母神：東京都台東区）

石神井に戻って来て10年 正古誠子

一九五六年春、茨城県の田舎から、東京都練馬区に引っ越して来てから六十七年。近くの新設区立小学校の一年生になってからの東京暮らしを、住んだ町を中心に思い返すことがなかった。小学校の校舎は麦畑の中に建っていたし、周囲は畑だった。その頃から今も東京の田舎と言われる練馬区の都市化・住宅化が団地も含めて驚くべき早さ、多量化で進行している。人口もふえている。そこから高校の頃、家族と同じ練馬区の石神井公園の近くに引っ越した。思えば七歳の時からほとんど西武池袋線沿線に住み、通学も中学生から十年近く同じ駅間を往復し、働き始めてからもまず池袋までは西武線だった。

三十歳で一人暮らしを始め、二〇一三年にまた石神井に戻って来るまで四回の引っ越しをし、四十年ほどが経っていた。住んだ「わが町」は五カ所になり、地名は覚えているが、移った時期や住んだ年数など今やもうあやふや。石神井も変わっていて当然だが、石神井公園は変わっていない方だろう。公園には東西に並んで二つの池があり、趣きも違い、狭い割りには歩くと景色に変化がある。公園は駅から歩いて約十分。ゆるやかな下り坂を下りると、すぐ東側のポート池が見える。池沿いに歩き、池を分けるバス道路を信号で渡ると、西側の三宝寺池区域に入る。奥方向に向かって進むと武蔵野らしい雑木林、木立が高低のある地形のまま繁り、木道が整備され歩きやすくなった。二つの池はそれぞれで、年代を問わず歩く人たちはにぎやかだ。かなり昔、私が父に一人でポートを漕いでみたいと言うと、「あの池は深くなさそうだから、ポートがひっくり返っても、あわてず立ってみる。案外立てそうだ。」

立てなかったら仰向いて浮かんでいれば、ボート係がすぐ気付くだろうし」と、一人は危ないとは言われなかった。それで時折、ボートを漕ぎに行き、かいつぶりが潜るのを近くで見たり、ボートが早く進むオールの角度を試したり、少し深いとザツと底の泥にふれて、池の浅さを確認したりした。ところがある日、「女性が一人でボートを漕いでいるから珍しいと見ていたら正古さんだった。ああいうボートはカップルで乗るもの。漕ぐのは男」と顔見知りと言われた。今なら、そんなことをわざわざ言う人もいないだろう。なんかつまらないことを言われたと思った。そのころ、「ジェンダーフリー」という言葉を私は知らなかった。

私は今、住んでいる石神井が暮らした町として一番長くなった。長く住むと気づくことがある。どこか違和感がある。私はこれからもここに住み、この町を考えるとながら、その核心に近づいていきたい。

蛇崩川緑道

田村 元

二〇二三年の二月に、十年住んだ横浜から東京の目黒区に引っ越した。横浜というのは起伏の多い地形で、私が住んでいたあたりも、日吉駅からかなりの坂道を登ったところにあった。引っ越してからは、家の周りがほぼ平坦な地形のため、気軽に散歩ができるところが気に入って、ちょこまかと歩き回っていた。

わが家から少し歩いたところに、「蛇崩川緑道」という、暗渠の上に作られた緑道がある。「蛇崩」は「じゃくずれ」と読む。めぐる観光まちづくり協会のホームページによると、もともと蛇崩川は目黒川に注ぐ小さな川で、「流れる形が赤土の地層を崩したように蛇行しているところから「蛇崩」の名がついた」そ

うだ。

すぐにピンときた方も多いかもしれないが、「蛇崩」は佐藤佐太郎が繰り返し歌に詠んでいる地名である。佐太郎は昭和四十六年、六十二歳のときに、青山から目黒区上目黒に移り住んでいる。今回、この原稿を書くに当たって、『佐藤佐太郎集』（岩波書店）の「年譜」に載っている住所をGoogle Mapで検索してみると、まさにこの「蛇崩川緑道」にほど近い住宅地に赤いピンが立った。わが家からも歩いて行ける距離だ。

引っ越し前にはまったく意識していなかったが、偶然にも佐藤佐太郎の生活圏の目と鼻の先に住むことになったわけだ。私は以前、佐太郎が「電車にて酒店（しゅてん）加六（かろく）に行きしかどそれより後は泥（どろ）のごとしも」（『歩道』）という歌に詠んだ「酒店加六」について、当時の文献や地図を調べて、どこにあったどういう店だったかを詳細に調べたことがある（拙著『歌人の行きつけ』所収の秋葉四郎氏との対談を参照）。佐太郎のことは歌人としても酒飲みとしても、心から尊敬しているので、身近なエリアに住めることになったのは幸運である。「蛇崩川緑道」はまだほんの一部しか歩いていないが、佐太郎の歌集を手に、片道約三キロの道を散歩してみるのも悪くないかなと思っている。

もっとも、佐太郎がこの道を歩いていたのは六十代以降の晩年の時期で、私もそれくらいの年齢になるまで、楽しみとして取っておくのもいいかもしれない。「蛇崩」という地名の独特の響きにも惹かれるが、私もまだ四十代なので、もうしばらくは、静かな緑道よりも、駅前夜の横丁のほうに足が向くのではないかなと思っている。

ゴールデンウィークも後半戦に入り酒飲めばやがて蛇崩となる

田村 元

林試の森公園

間 ルリ

人生の半分以上を横浜で過ごしましたが、今は縁あって東京の目黒から横浜歌人会に参加させていたでいます。なんととっても家の近くに林試の森公園があるので空気の良くない東京でもなんとか歌の種を頂いて暮らせています。

耳底に蝶のささやく「永遠」を沈黙の中に閉じ込めようか

息子たちが新潟で暮らしているので「永遠」には目黒では暮らせない予感がしています。二年に一度ほど優しい大工さんや水道屋さんをお願いして少しずつ築五十年の古屋を改修しています。「永遠」に蓋をしての庭仕事に歳月が過ぎていきます。

空の果て^{えんのぎょうしち}役業者^{やくぎや}について来た鬼も楽しむ大島桜

林試の森公園の春は様々な種類の桜が楽しめます。大島桜は特に樹齢が長い大ぶりの樹で、鬼までもこころを和ます気がしています。

湧き水に小鳥は遊び芹、薺の種をわが家に運び来るなり

小鳥だけでなく、風も運んでくるようですが、林試の森に生息している植物のいくつかは我が家に生息しています。一鉢に山椒と南天が自然と生えている植木鉢もあります。

一年の役目を終えたと紅葉の葉それぞれの色の装飾音符

針葉樹も広葉樹も混じった林試の森の秋は絵具のパ

レットのようです。地球温暖化で新年の一月になっても散らない葉もあります。でも春になると必ず芽吹いてくるのは自然の摂理なのでしょう。

人あらぬ冬の林よざつくりとビルの裏にと視界を広げ

林試の森公園は都立ですが、目黒区と品川区で半々に跨っています。武蔵小山商店街にタワーマンションが数棟建ち、冬になると木々の間から高層のビルが見えます。樹齢百年を超えるアメリカスズカケやトリネコ、レバノンシダーなどの樹木はしっかりと春の準備をしています。タワーマンションに棲む人々も眼下の公園を日常の中に取り入れていることでしょう。私の古屋も高層ビルに囲まれる日が来るのでしょうか。

「世に無き時間」を思う 鯨井可菜子

今年、十年暮らした横浜を出て、目黒区のある町に引っ越した。腰を落ち着けたのは、二十四歳から二十五歳にかけて初めての一人暮らしをしていた町。ロータリーを持たない駅前様子は、十三年たってもほぼ変わっていない。東西にのびる商店街も相変わらず活況だ。西口の果物屋さんの暗がりには十三年分小さくなったおじいさんが今も座っていて、二十五歳の私が八時間飲み続けたことのある焼き鳥屋では、当時二八〇円だった「黒糖そらまめ」が三六〇円になっていた。少し変わったと感じることは、飲み屋街をおしゃれな若者たちが闊歩していること。夫と私の組み合わせでは、気後れして入れないお店もある。もしかすると、単に自分が年を重ねたというだけかもしれないが。

先日、河野裕子についての調べ物をしていて、かつて永田家がほんの束の間を過ごした「目黒」というのが、自宅からそう遠くない土地を指すことを知った。同じ路線の、東京寄りにひと駅。歌集『日付のある歌』（本阿弥書店）には、東京での用事について、夫の永田和宏とその頃の住まいを見に行った一節がある。

一歳の淳が腰かけ遊びぬし階段そのままに青沼荘入口 河野裕子『日付のある歌』

『河野裕子読本』（角川学芸出版）所収の「家族団らん」、つまり永田家の鼎談のなかで、永田はこの「青沼荘」を「本当に狭い、汚いアパート」だったと述懐しており、前掲歌が詠まれたときのことを「十年ほど前にそこにもう一回行こうということになり、お母さんと行ってみたら、それもまだあって、びっくりした」と語っている。試しにグーグルマップに名前を打ち込んでみると、さらに十年以上を経た今も、このアパートはどうやら現存するらしかった。

昔とは世に無き時間乳母車押してのぼりし坂は残れど 河野裕子 同

坂道を眺めていると、若い母親が「乳母車」を押す姿がぼんやりと浮かんで消える。過去を思うひとときが留められた一首だ。まさに「昔とは世に無き時間」であり、作者も世を去ってしまったが、短歌には「昔」をアーカイブする力があるのだと、改めて思う。

西口に出ればすれ違う心地する歌をはじめた頃の水たしと 鯨井可菜子『アップライト』

多摩川の渡し守のものがたり

―大田区下丸子

松平盟子

大田区下丸子の、多摩川にほど近いマンションに引越して来たのは二〇〇三年七月末。つまり今年はこの地に暮らして丸二十年となった。

東急多摩川線の最寄り駅の一つは下丸子。蒲田―矢口渡―武蔵新田―下丸子―鶴木―沼部―多摩川のわずか七駅しかない短い路線ながら、駅名に由来する土地のありようは、明らかに多摩川とその流域の広大な湿地帯の存在を示唆する。

しかるに下丸子、その「丸子」とは何なのだろう。

転居当初、身近な人に聞いたりもしたが、誰も首を横に振るばかり。随分古くからある地名ですよ、がせいぜいの答えだった。ネット検索しても当時は項目数が少なくて納得する内容には出会わなかった。

もう一つの最寄り駅は武蔵新田。こちらは駅に程近い新田神社が有名で、二〇一〇年にパワースポットという語が流布すると、しばしば採り上げられるようになった。いわく南北朝時代に新田義貞の第二子・義興が多摩川で姦計に遭い非業の死を遂げると、その怨霊が人々を苦しめた。怨霊を鎮めるために造営されたのが本神社の起りという。武蔵新田の隣駅の矢口渡は、義興が舟に乗った場所にちなむ。水量の多い多摩川は過去に何度も流れが変わり、当時とは数百メートルも隔たるらしい。

おっと、矢口渡と聞けば、江戸末期の平賀源内の戯曲『神霊矢口渡』が有名。先ごろ閉館した国立劇場で文楽、歌舞伎のどちらの公演でも観たなあ。新田義興を陥れた渡し守の頓兵衛は強欲で赤面はいかにも憎々

し気だった。けれども、足利方の謀略に加担して義興を誅殺した罪を深く悔い、頓兵衛はその冥福を祈るために「頓兵衛地蔵」を建てたと伝えられている。

で、その小さな「頓兵衛地蔵」を祀るお堂が、ちゃんと残っているのである。武蔵新田駅と下丸子駅をつなぐ線路のかたわらと言っている近き。数百年前に流れていた多摩川の土手沿いに当たる。

あらためて地名の丸子を調べてみる。多摩川の流れが分断したが、現在の大田区下丸子と川崎中原区の上丸子、中丸子は同じ村だったという。また東海道五十三次では駿河国に丸子宿があった。他にも丸子はあるが、どれも川に深く関わる地域につけられた地名らしい。一説によれば渡し守を意味する「守り子」が訛って丸子に転化したともいう。なるほど。

探せば、見つかる

大橋 弘

私は今、分水嶺の近くに住んでいる。というと、大山脈の谷間から湧きだす大河の始まりを想起する方もあると思う。が、私は東京南部、品川区に程近い大田区の北馬込に住んでいる。それが実は、西を向いて立った時、左は大田区北馬込を水源とする内川、右は目黒区碑文谷池などを水源とする立会川を見おろす立地なのである。さらに背後には、やはり北馬込を水源として周辺の小さな湧き水を集めて大森山王へと流れ下る旧池尻川（今は暗渠）の最上流部がすぐそば。スケールこそいささか小さいが、三つの川の分水嶺だ。

内川の水源は自宅から徒歩数分、なだらかな斜面に立て込んだ家々のあわいの下水溝、としか思えない場所である。近づくとしかし、絶え間ない流水の音が聞

こえる。少量ではあるが、水が湧いている。立会川は本流の水源こそ遠方であるが、往昔、方々からの湧き水を集めて本流に導いた、旧河道の風情を偲ばせる小路が目につく。池尻川方面も、行くところに行けば、それとなく流水の音を耳にするポイントはまだある。

大田区は、東京都区部の東南端であり、多摩川を境界に川崎市と隣接している。大河の河口に位置するだけに、低地が主体だという印象もあろう。現に、品川と川崎を結んでいるJR東海道線から東側は、平地である（大森付近では、線路が台地と平地の際を走っているのである）。しかし、北馬込を含む区西部の多くは台地。地質学の用語で言うところ北馬込の辺りは、武蔵野台地の東端、下末吉面に属する荏原台にあり、立会川が開析した小ぶりの谷を挟んで、武蔵野面に属する目黒台をすぐ目の前に見晴らかしているのだ（二つの台地にそれほど高低差はないが、このあたりは少し荏原台が高いかもしれない）。表現によっては、ちっぽけな人間の立ち位置も、ずい分スケールが大きく見えてくるものだ。

もともと同じ大田区でも、羽田空港に近接した地域に生まれ育っているため、結婚後に住み始めた今の土地は、いわば「第二の故郷」のようなものだが、三十年も住んで日々歩き回れば愛着は深まる。北馬込も今や武蔵野の面影などほとんど残存していない住宅地だ。ただ、往古から連綿と続く土地の特徴は、探せば見出すことができる。何も北馬込に限ったことでもないが、そこから短歌を抜き出すか否かは、別の問題だ。私はただ分水嶺に立っていると思うだけで、楽しい。

川に沿って歩くあなたは不安から切り離された落葉なのかも



> 3 林試の森公園（東京都目黒区・品川区）



> 4 池上・貴船坂から川崎方面を望む（東京都大田区）



> 5 呑川に架かる雪の橋（東京都大田区）

坂のある町

ユキノ進

東京に来てからずっと池上線というマイナーな路線の沿線を転々としている。池上線は片道の所要時間が二十分少々とても短い。三両編成の小さな電車はやる気なさそうに毎日、五反田と蒲田のあいだを行ったり来たりしている。鉄道というよりはバスみたいだ。地下鉄やほかの私鉄との乗り入れもなく都内を走っているとは思えない緊張感の無さが池上線の特徴だろう。

今住んでいるところの最寄り駅は石川台という駅で小津安二郎の『秋刀魚の味』にも登場する。驚くのはもう六十年前の映画なのだが、駅の雰囲気はほとんど変わらないところだ。映画の中で岩下志麻が佇んでいる場所は、通勤の時に僕が電車を待っているのと同じ位置だ。そして見晴らしのよい景色も変わらない。今も

屋根のないホームの上には大きく空が広がっている。

見晴らしのよさの原因のひとつは駅前に今も高層マンションが少ないことである。そしてもう一つの要因は高低差のある地形だ。周辺の地名は雪谷^{ゆきがや}という。地名のとおり谷状になっているため坂が多い。町並みは古くてまっすぐな道ばかりではないので、曲がりながら登る坂など景色にアクセントがある。散歩していても楽しい。近所の図書館に行った帰りに坂の上から見る夕景なども美しい。抜け感のある風景が使いやすいのだろう、CMやドラマのロケ隊もよく見かけると。テレビを見ていると「あ、あそこだ」と近所の景色を発見することがしばしばある。

坂の上の方は高級住宅地で大きな邸宅が建っているが、僕が住んでいるのは谷底で下町っぽい商店街の裏になる。最近廃業してしまったようだが、隣ではスナックをやっているときどきへたつぴなカラオケの声

が聴こえたりした。そしてその谷底には川も流れている。川というよりは用水路といった方がいいコンクリートで固められた小さな流れだが覗き込むと小さな魚を見ついたり、鴨が泳いでいたりとちょっとした自然を感じることもある。

住宅街を流れているため橋がいくつも架かっているが、どれも数メートルの短いもので名前を気にしたことがなかった。というか名前がついているとは思っていないかった。しかしある時、自宅の目の前の橋の欄干に名前が書いてあることに気が付いた。橋の名はなんと「ゆきの橋」。ユキノ進という筆名を使い始めて何年も経た後のことだ。思いがけない偶然に、町に対する愛着が増したのだった。

三両の小さな電車はこどもらの影と真昼のひかりを運ぶ

蟹ヶ谷の老齡者住宅模様 津波古勝子

朝夕を読書にふけり、それを人生の悦びとしていつしか八十四歳の域に達してしまった。「しまった」という表現は実に直情的で、現実社会に身を委ねる有り様に閑知することなくのんびりと存えて来て「しまった」のだ。

現在、川崎市高津区蟹ヶ谷の四方嶺住宅跡地に建つ「ココファン」という介護対応終身賃貸住宅に住んでいるが、恥ずかしながら「介護」の概念とは全く無縁の愚か者であった。此処へ来て初めて目にする高齢者の集団に胸を痛めている。百名近い中の二割が車椅子、約四割が杖を頼りに暮らす。殆んど独身者で夫婦組は一割ほど。筆者も夫と共に四月から入居しているが、哀しからずや認知症の夫の対応に苦しむ…。

あたたかき朝の緑茶に乾杯す夫との慣いホームの微笑

会話なき夫の背をさすりいる遠き夜景の星のまたき

名も知らぬ車椅子の女朝夕の食堂に左の手を振り笑まふ

むし暑き梅雨の晴れ間の鉄塔に嘴太カラス片羽ひらく

漆黒の羽ひらめかし蝶の来るふわりふうわり言葉は要らぬ

介護とは、老齡や心身の障害により日常生活を営むことに支障がある人に対して家事、健康管理、社会活動の援助を行う事をいう。

「ココファン」に暮らして四ヶ月、朝、昼、夕食とも食堂への送迎、身辺介護など実に涙ぐましいほどの愛

情に満ちた介護を享受して穏やかな日々を送っている。

蟹ヶ谷は、下末吉台地の北東部に位置し北端を矢上川が流れる。江戸期は天領であった。縄文時代からの遺跡が多数発見され、蟹ヶ谷でも市内唯一の前方後円墳が発見された。

一九六〇年以降宅地化が進行し全く別次元の景に変化してしまった。

車椅子の夫の額に唇を か細き肩をひしと抱きしむ

夜の深けを見舞う介護の若者に双掌を合わす声の詰まりて

ゆく夏の朝のしめりに手間かけて練り合わさるる酢物の香

大根を煮る香の満つる食堂へ朝の祈りに車椅子押す

「暮らす町角」の依頼であるが、外部との往来が殆ど無くこの様な異色になってしまった。

わが町みずが丘

中川宏子

私の住む町みずが丘は、横浜市青葉区に位置する。ここに東急の開発が入り大場町から「みずが丘」という洒落た名前になり分譲住宅の開発が進められてからもう三十年以上になる。聞くところによると「みずが丘」が繁茂していた場所らしい。凡そ四百数十世帯の寄り集う丘で、番地があっても〇丁目というものは無い、こじんまりとして住み易い町だと私は感じている。

東急の第一分譲の住宅に入居し、最初の班長を務

めさせて頂いた。住所録や回覧表、ごみ当番表からお当番札等、最初にいろいろな物を作らせて頂いたのもご縁と感謝している。「みずが丘公園」を作るに至ってもただの野原をどのような憩いの場所にするかを引つ越してきた住民の皆さんと考えてアイディアを出し合ったのも良い思い出である。みずが丘公園はそののちドラマ「非婚家族」のロケ地にもなった。英国風を模した町並みはその後も緑山スタジオが近いせいか時折ドラマにも使われた。拙宅にも「門扉だけのやり取りでコマースャルに使わせてほしい」と掃除メーカーさんから申し出があったが、私が「長く旅行に出てしまう」と言うと、翌日丁寧な断りの電話が入った。ギャラだけでも聞いておけば良かったとも今となっては思う。

最寄り駅はあざみ野駅と江田駅である。「あざみ野」も東急により作られた地名であるが、その言葉の風情から初期の歌集には何首かあざみ野を詠った歌が入っている。

この丘の大通りには八重桜の並木が植えられていて、丘の下平坦なあざみ野の街の桜通りの桜並木とほぼ続く形が取られている。春の花の頃は桜の次には八重桜、その次には江田へと続く道に花水木が満開になり、その木々の根元に植えられた白躑躅も長く満ち咲いて本当に美しい光景を眺めることができる。花をつける木々も美しいが紅葉が美しい公園も近くに点在することが常に私の歌心を揺さぶってきた。どれほどの歌歌が公園で生まれたことだろうと振り返る。コロナ禍であった頃はゆつくりと公園を巡ることができなかったが、コロナが収束するのが待ち遠しくて堪らない。

二つめのふる里と思ふあざみ野に真昼の月は白々と出づ

都会で田舎で

渡部洋児

保土ヶ谷から青葉区に移り住んで十年になる。家がほんのちよつと高い場所にあるので、窓からは道路や川や線路などを見渡せる。生まれが藤沢なので、海から山に移ってきた感じが強いが、渋谷まで田園都市線で約三十分と至便な地でありながら、恩田川の両側には田畑が連なる。横浜なのに、である。

窓からは246が見え恩田川が見え遠く去りゆく横浜線が見え
調整区域なのかもしれない県道を渡れば田舎の横浜があり

家の近くに田畑が広がるという環境に住むのは初めてのことで、時折川縁を散歩するが、あまり手入れのされていない川には草が茂り、鴨が泳いでいる。この川を下ってゆくとどこに出るのか、などと思いつながら歩いているとシクラメンの幟が見えた。ハウスの中には大小色とりどりのシクラメンが並び、思わず実家や子供たちの家用の分まで買ってしまった。それも今となっては思い出だ。ご主人が亡くなり、栽培を止めてしまったのだ。でも、今度は新しく柿農家を見つけた。気のいいご主人が相手をしてくれる。

川縁を行けばたちまち立ち止まり鴨探しおり鴨の鳴き声
シクラメン農家の主人亡くなりて柿売の幟の秋となりたり

でもやはり田園都市線が通るせいか青葉区は東急の

色が強い。それこそ駅ごとに東急ストアがある。便利でしかも田舎にいるような気分も味わえる。そんな町なのである。

東急のまちかも降りる駅ごとに東急ストアありて、夕暮れ
農協の直売所ありメガ・ドンキありてわが家の秋がうるおう

でも一つ気になるのはごみの多いことだ。住宅地にはあまり無いが、国道の脇は雑草とごみだらけなのだ。日本はごみの落ちていない綺麗な国、という海外旅行者の話を聞くたびにうすら寒い思いがする。これからも自分のできる範囲でごみを拾い続けるしかない。なぜならここを終の棲家と思い定めているのだから。

自分達の町

桜井健司

今から三十年前、北関東から市内青葉区の北西部へ転居してきた。緑が多く美しい街区を形成している点が入ったためである。住み心地は良い。実は一歳から二十一歳までの間は隣接している川崎市に居住していた。小学校に就学する以前、青葉区（当時の行政区は緑区の一部だった）を訪問する機会が頻繁にあったため、当時の区内の様子は鮮明に記憶に残っている。

一九六〇年代の後半、私が幼少期だった頃の当時の緑区は、区内を縦断する私鉄が延伸されたばかりであり、本格的な宅地開発の始まる前に当たる。剥き出しの地面や草むらがどこまでも連なり、畑や雑木林も多く、町と呼べるエリアは駅前周辺の僅かな地域に限られていた。開発は進み、三十年前に転居してきたときには、剥き出しの地面や草むらにはすでに立派な町が出現し

ていた。現在では商業ビルやマンションが林立し、戸建て住宅群の広がる首都圏有数の住宅街となっている。ただ、その街区も駅周辺からせいぜい二、三キロメートルぐらいまでであり、それ以上離れると畑や緑の残りのどかな土地が広がっている。自宅から徒歩圏にある桃畑は殊に美しく、毎年春になると花を咲かせる。

桃の花ひらく静かな朝は来ぬほどかれていく春の時間は

さて、件の街区であるが充実している一方、何か少し物足りない。人にも町にも光と影、またその間の混沌と呼ぶべき部分が存在する。しかし、この町には光が及ぶ範囲があまりにも広く、影や混沌がほとんどない。具体的な例を挙げれば、路地裏が存在しない。チェーン店が多く、個性的な個人商店が少ない（出店してもすぐに撤退する）。なぜかという答えは明瞭で、戦後に大手の事業会社が鉄道敷設と共に計画的に開発した町だからである。影の部分である路地裏は不要物と見なされ、都市計画の段階から手際よく排除されているのだろう。また、住民の気質からか、個性的な個人商店はあまり支持されていないようだ。チェーン店の方が手堅く安心という判断が働いているのだろうか。

光と影、その両者がブレンドあるいは共存しているのが理想の町と思う。ただ、陰影は計画的に作り上げられるようなものではない。都市開発が一段落し、長く居住している人々の間から自然発生的に現れてくるものだろう。ほの暗い路地裏や個性豊かな商店がこの町のあちこちに出現したときこそ、自分達の町が本当の意味で完成する時なのかもしれない。

アカシア、ハクウンボク花の町

鹿取未放

近所を歩いて花や樹木を眺めるのが好きで、写真を撮ってブログにアップしたりしている。

歩いて二分くらいの烏山公園にアカシアの樹が三本植わっていて、クリーム色の地味な花を付ける。だから地面に散り敷いてやっと花が咲いていたことを知る。その花を歌に詠んだら、歌曲にして歌ってくださる方があって、ありがたいことだった。

はつなつの花アカシアがふりこぼすわれの失意の
そのひとつづつ

ところで、三本と思っていたアカシアの木は、公園の裏側から中学校、小学校にかけて二十本ほどあることに最近ウォーキングを始めて気がついた。

また、この公園を抜けて中川駅を通りこすと緑道に出る。緑道を二キロほど歩いた徳生池にはニセアカシアの木が数本あって、こちらは白藤に似た華麗な花を付ける。地味な花が中国原産のアカシア、華麗な花が北米原産のニセアカシアだ。ところがこのニセアカシアは明治期にアカシアと称して輸入された為、両者の名前は現代まで混同されてきた。たとえば札幌のアカシア並木も、西田佐知子の「アカシアの雨がやむとき」も実はニセアカシアなのである。

ところで、烏山公園脇の車道の両側には、白雲木の並木がある。エゴの花を三十ほど連ねたような白い花が簪のように房となって咲くが、こんなに身近にあるとは知らず、北鎌倉の浄智寺まで長年花見に出かけていたのだが、まさに灯台もと暗しであった。

他にも中川駅の裏の通りにはハナミズキの並木がある。この駅周辺には沢山の花壇を置いていて、月一度の花の手入れには私もボランティアで参加している。

また、中川にはウォーキングの会もあって、月一回数人のメンバーで周辺にある複数の緑道を繋いで歩いている。都会にこんな深山幽谷のような場所があるのかと驚くこともしばしばである。六月には紫陽花を求めてセンター南駅近くの正覚寺にウォーキングした。様々な色の菖蒲も見頃、池には一面に真っ白い睡蓮の花が咲いていた。眺めていると十羽の子ガモを引き連れたカルガモが睡蓮の間から現れたのだった。

カルガモは一〇羽の雛連れ睡蓮のしろはなを縫ふ
一羽も死ぬな

私のまほろば

小林 勝

私の住まいは、北を大塚・歳勝土遺跡公園、南を茅ヶ崎城址公園の段丘に挟まれた谷間にある。一番低いところを鶴見川にそそぐ早淵川が流れている。低地であるから、線状降水帯などの予報はとても怖い。

自宅を出て、百歩も歩けば早淵川である。上流に十分足を延ばせば、都筑中央公園のゆたかな自然に浸ることが出来る。

八年前、大病の手術を受けるまでは、中央公園に遊びさらに緑道を散策するのを日課とした。

緑道は深い慮りのもとニュータウンに張り巡らされた、花と鳥と風と水そして樹々を透かし降る光の径である。私の散策は中央公園から「ささぶねのみち」に出て「せきれいのみち」をゆっくり辿り早淵川に戻って帰宅するのを常とした。

その緑道の風光に感応した滴りを収めたのが第二歌集『アンダンテ』である。古希の年の刊行だからもう十五年前のことになる。

靴はけばおのづと足の向く先はわがまほろばと思ふ
緑道

というような日々を送っていた思い出をとどめる歌集に今はなつてしまった。

盛りあがり裏返さるる黒土のゆたかな春の耕しを見つ

あふむけの蟬の骸をいくつ見ば今朝の散歩の終りとならむ

ゆるやかな坂のくぼみの団栗はいつもの秋の森の豊饒

櫟には櫟の影が櫟には櫟の影が冬の日清めり
大き犬糞をしぬたり哀しくてならぬといふがごと
き目をして

緑道では人恋しい老人にとってはありがたい出会いもあった。

寂しさの零せる声か彼と我とすれ違ふときおはやうと言ふ

八年前に大病をして以来、気ままに緑道を散策するのもままならなくなった。今春、桜だけは見に行った。

射干の花辛夷の花もよかりしが緑道覆ふ大島桜

私の作歌姿勢

林 静峰

湖笛会という短歌結社は、医師として勤務していた父が昭和二十四年に心のケアの為に当時の国立松江病院に開いた小さな会であったものから発展した。私が、入会することになったのは、会員を少しでも多くしようと意図した父が、私の学生（大学）の頃友人数名と裏磐梯に登山した時のエッセイを父に送った時、計らずも湖笛誌に載せられ、いつの間にか会員にさせられたのが切っ掛けであった。

私は大学の英米文学科を経て、引き続き大学院修士課程で二年間英文学を学び、卒院と同時に東京都荒川区の中学教員となり、英語を四年間教えることになった。しかし、英語を更に究めたく思われ、大学院の博士課程で三年間学び、主として、英語による修辞学的表現に心に向けて学習した。そこには、吉川美夫教授がおられ、多大な教えを頂き、実に幸いであった。私が日本歌人クラブのかつてのタンカ・ジャーナル誌に於いても、また現在の国際タンカ誌に於いても、投稿を継続することができたのは、大学院での学習のお陰であったと思われる。しかしながら、私が短歌の道に真面目に取り組もうと意図したのは林霞舟・林宏匡と共に出した「三珠樹」の後、しばらくしてからであったように思われる。それまでは教材関係の仕事で多忙であったためであったようだ。とは言え、「短歌」なるものに係ってから、半世紀余りの年月が経っているのには、吾ながら驚く。

平成十八年三月に非常勤講師（英語）の職を辞して以来、お陰さまで、自己の自由な時間を存分に楽しむことができるようになった。健康の上では、まことに恵まれていて、病気というような患いは無く、視力が

劣えてきたこと以外は支障のない生活を送っている。

趣味として、詩吟、短歌を継続中。毎朝、時には夕方散歩に出掛けている。散歩は、近所の川「早渕川・鶴見川」沿いの道や公園。半時間程度の短期間であるが、自ら短歌が湧きでてくる。そのお陰か、生活リズムが出てくるように思われる。短歌は私の日記のようなものという考えは、今でも変わらない。

門口の千日紅に覚まれ晴天のもと散歩に出づる
猛暑予報あれども盛るオシロイ花紅白黄に彩なし
ている

ふり返る散歩路の上高々と揺るる竹の秀今朝も励
みに

窓開れば金木犀の香りくる季の来れり朝のめぐみ

菊名池

山本登志枝

私が四十年以上住んでいる所は、東横線の菊名と妙蓮寺の中間の坂の中腹で、二階からは富士山や、新横浜のプリンスホテルペペの建物が見えます。

プリンスホテルペペの向かって右側に今年も夏至の夕日が沈む

永く住んでいるので夕暮れの町をながめて今年ももうすぐ夏至になると分かるようになりました。

『港北区史』によると菊名には小さいけれど貝塚もあるということです。菊名の開拓は、鎌倉幕府崩壊後この地に逃れて来た落武者や、農民によつてはじめられたとも、相模の国三浦郡菊名邑の豪族菊名氏が、移り住んだのが地名の起こりなど諸説あるということだ

す。鎌倉街道だったという道が今も残っています。長い歴史があるらしいのですが今は坂の多い静かな普通の住宅地です。

菊名駅近くに昔はカーボン山、今は桜山公園という八重桜の林のような小山があり、買い物帰りによく通ります。越して来た当時は桜の花に手が届く若木で、幼かった子供とやがて、孫と花びらで遊んだことも懐かしい思い出です。小鳥の声や、蟬の声をききながらこの山の小道を通り、今は大きくなり鬱蒼としている八重桜の木を見上げると、過ぎ去った歳月が思われて感傷的になることがあるこの頃です。

妙蓮寺に買い物へゆく途中には菊名池という池があり、越してきた当時も今も毎年冬が近づくと、キンクロハジロが渡ってきます。周囲には桜の木もありここも買い物帰りによく立ち寄ります。ベンチに座り、水面を眺め、空を眺め、小鳥の声をききながら、休憩するのは気持ちのいいものです。翡翠に会えることもあり、鯉、亀、鶴、鴨、鳩などいいて、桜の頃は池の面に桜が映り、花吹雪があり、花筏も浮きます。この池は越してきた当時は蒲に覆われていました。春、水のなかに角ぐみはじめた柔い緑はほんとうに美しかったです。やがて蒲は滅び、蓮が覆うようになり、そして今は河骨が覆っています。

自然と言えばそれくらいの平凡な住宅地それがいつかあちらこちらに思い出の残る私の暮らす町です。

花びらを散らしては喜びおし君が高校生になりたるこの春

母と見しベンチに座り花びらの池に散りゆくのかさにある

まぼろしの川

時本和子

私の住んでいる町は丘陵に囲まれた谷間にあり、その中程に位置して横に長い公園がある。公園は「水道道」と呼ぶ一本道に二分され、片側には市営の屋外プール、一方には広場と、その奥に樹々に囲まれた古い池がある。池には、秋になると軽鴨や金黒羽白、真鴨などの水鳥が渡って来て活気を呈するが、近隣の人が散策する程度でひっそりした佇まいはそのままだ。池が手狭になる頃、軽鴨たちは昼のあいだ道を隔てたプールへ移動する。季節を過ぎたプールで思い思いに過ごす鴨、なかなか楽しい景色ではある。

秋の陽の落ちゆくところ町を貫く一筋道の上りきる果て

河骨^{かうほね}を沈めて広き池の面^{おもて}に六、七十羽のキンクロハジロ
まばたきをせぬ鴨の眼がわれを見る水中にては藻など探す眼
冬枯れの葦の間ほそく空^すくところ一羽の鶴が顔を出したり
幾山を越え来て谷間に広かれるこの地を住处としし人びと

二十数年前にここに来た当初、私はよく想像した。いつの頃から、長い旅をしてこの地に辿り着いた人々が、樹々に囲まれた池のほとりに暮らしを始めた昔を。

ところでこの池、五十年前に先の「水道道」が開通する以前は、公園全域を容れるほど大きかったという。さらに以前は、農業用水のための貯水池で、近隣

の田畑を潤していたこと、その歴史は平安時代まで遡るらしいことを知ったのはつい先頃のことである。

かつて川でありしとおもふ枝道をたどりて隣の町まで歩く
未だによく分からぬところのある息子 川底だった道戻りつつ

用あって、私は隣町の菊名まで枝道を歩くことがある。その道は、家並より低いところを川のように蛇行しながら続いている。話は貯水池だった池に戻るが、山からの流れが池に注ぎ、一部は鶴見川まで流れて行ったのだという。それこそがいまは暗渠となった「幻の菊名川」で、私が時折歩く〈枝道〉だったのだ。近くに「菊名橋」というバス停がある。橋も目に触れる流れもないが、その痕跡を感じるのは興味深い。



> 6 新横浜元石川線たまプラーザ駅入口交差点（横浜市青葉区）



> 7 カルガモの親子（正覚寺：横浜市都筑区）



> 8 菊名池（横浜市港北区）

縄文人を偲べる町

中村規子

港北区下田町に結婚後住むことになり六十年になる。最寄の駅は、東急東横線日吉である。今年全国高校野球選手権記念大会で神奈川県代表の慶應義塾高校が優勝した。日吉中央通りの入口には「祝 おめでとう慶應義塾高校」の横断幕が掲げられ、町は明るい。

打撃 守備共に見事と観てゐしが 出場四十九校の頂点に立つ

この日吉駅からバスで七分位下田地蔵尊というバス停が、私の下車駅である。少し歩くと、元庄屋さんの田邊家、東に下田神社、西に曹洞宗真福寺下田地蔵尊がある。この神社、寺の建立には、田邊家が大きく関わっている。田邊家は、徳川家康が、関ヶ原の戦に勝って江戸幕府を開く際、田邊家の初代・大炊助とこの地に来て、ここに住めと言い、幕府直轄領（天領）三十石、五人扶持と苗字帯刀を許し、現在の地（横浜市港北区）に定住させ、この地の管理を任せた。今は、田邊家の中には、日吉の森庭園美術館がある。これは、田邊泰孝記念館、日吉の森庭園、田邊光彰美術館からなっている。日吉の森庭園は、竹林の中に、樟、白檜、榿、椋、戴楯、戴紅葉など多くの樹木がある。遊歩道を二十分程散歩すると湧き水によって作られた池がある。この庭園は、目白の椿山荘と同一の設計者によって作られた。池を見て進むと、田邊泰孝記念館の玄関に至る。この記念館は、築一六〇年を超える庄屋造りの建物である。田邊泰孝氏は、この地の発展に深くかわり多くの要職を歴任してきた。公益財団法人日吉の森文化財団の創立者、初代理事長である。こ

の記念館の中に自宅の庭から出土したという縄文土器、石器が展示されている。「貴女の家の庭を掘れば、同じものが出てきますよ」と言われ驚いた。今私の住んでいる土地は、約七十年前元庄屋さんだった田邊家が、分譲してくれた時に購入したものである。

縄文人 家康の踏みしこの土を踏みしめ花咲かせ私は生きる

彫刻家、田邊光彰記念館には、沢山の光彰氏の作品が展示されている。のぎの非常に長い古代稲のモミをステンレスで作った作品が印象的であった。光彰氏の作品は、神奈川県には十五ヶ所、東京の他五県、外国にも展示されている。野生植物を大切に育て続けて、たくさんの酸素を放出させ住民の健康を支えている。

東急東横線の街〜綱島・日吉〜

宮下俊博

横浜に出てきて五十数年、なだらかな坂と平坦地の奥に丘があるこの地域に住んでいる。日吉台中学校の一角にあつた教員住宅。高校時代の友人から「鹿兒島を出て都会で働きたい。＼との手紙。私の部屋を根城にパイロットを目指したが惜しくも不採用。また物書きになりたいの思いがくすぶっていたある日曜日、隣の部屋の同僚と渋谷へ行く。異常なほど人があふれていた。火炎瓶が投げられ渋谷の街にこの世のものと思えない初めて聞く音が響く。野次馬集団も警察により宮下公園に収容される。後で知ったが警官の方が亡くなられ、渋谷暴動とよばれている。

教鞭をとった。学校近くのアパートを借りると塾帰

りの児童たちがひと時を安らぐ場となった。盆踊りの時振り向くと何十人もの児童が私の後ろに列となり笑顔で踊っていた。まだ田んぼが広がりに一、二度へ出水の為に臨時休校となる新興住宅地であった。ある夏、学校に泊まる二泊三日のクラス合宿を計画した。校長室で諭され、一泊二日で許可を得て多くの親御さんたちと共に親子の貴重な体験の場を創った。また、最初の卒業生が、地域に繋がりがなくて寂しいと言ってきた。話し合つてトッケビファミリーという人形座を立ち上げた。夏休みにリヤカーを引き公園などで五、六年間公演を行った。さらに東京の通信総合博物館、川崎の東芝科学館から声をかけられ出張公演も行った。綱島は東京の奥座敷と呼ばれ多くの料亭があつたが、殆どはマンションとなつていった。「イーターリーフクヤ」には店がなくなるまで四十年近く通つただろう。青山学院大学の野球部の監督や学生たちと飲食し語り合つた。同僚の異動の時や校長などと話し合うのに、会員制の部屋を使わせてもらつたりした。プロ野球界の小久保裕紀（敬称略）、脚本家の浅野妙子、M i・K e（歌グループ）の一人村上遥、歌人の田村元、小説家の五木寛之の奥様、そしてタレントで画家の岸ユキという人々との出会いはこの街があつたからだ。街は人と同様に生きている。妻ともこの街で出会い四十三年が過ぎた。彼女の支えのお陰で、短歌の世界の片隅にいる。この街も私も時空を共有して確かに育つてきた。

朝影に融けて白き街灯に都会の雀が瞬時を遊ぶ
児らのため二間の部屋を求めつつ歩む我が影に
三十路を見る

揺れ動く我が生き様が全てみな平和につながると
ふ初夢

老人の街

橋本千恵子

ひとつだけ残った三角地に、高層ビルが建った。その後ろには、日差しを売りにしたお洒落なビルが、重なるように建つ。鶴見川沿いで景色は抜群。まさか日差しが届かないようになるとは。新ビルは透明で、何か当たったら壊れてしまうようで不安になる。

最近赤ん坊の泣き声も、子供の走り回る姿も見ない。介護の車がいくつも入って来る。

外に出ると、リュックにねぎを立てて、ご近所さんが戻ってきたので、お元気ですねと声をかけると、私は生き過ぎたわ、今日誕生日で九十二歳。主人は九十歳で介護施設に週三回、あとは病院に通うと言う。二階家で屋上にバッティングで遊べるように、ネットを張り回してある。よくゴルフに行っていたし、おお声で笑うのが聞こえたのは、ついこの間にも思える。もう二階にも落ちそうで上がれない、下だけで暮らしていると言う。でも、紙おむつは有難いわ、私も夜は使っています。そう言えば、子供のおむつより、大人の紙おむつの方がごみとしてるのが多いと聞いた。勿論、生産量も多いに違いない。手のかかる主人が介護の車で出てゆくと、本当に有難いけど誰が考えたのかしらねえ、小泉首相の時です。急に天引きされるようになったから腹が立ち覚えているのと答えた。そう有難いわ。杖を突くだけで歩けるので立派である。

手押し車でゆつくり歩くご老人、コンビニ帰りである。何時も笑顔であるが、仲良しの友人を二年前に失った。あのコロナで逝ったけど、私も一緒に行きなかったと、この方もお馴染みさん。鶴見川を挟んで向こう側には、別れた夫と息子が住む。夕方になるとそこまで料理を運ぶ。別々に生活保護を受けているの

だと聞いた。そんな知恵を誰がつけたのであろうか。見るからにふけもせずお元気である。こんな例はいくつもある。貰える人は、国民年金生活者より多いのだ。まして別れて二人分の生活保護費である。法をかくぐり生を全うするしたたかさ、政府の手は届かない。

以前から住む人ばかりであるが、既に老人として全うされた。見回すとあれほどいた猫も犬も見ないことに気がついた。自分の散歩することも危ういのだから、当然かもしれない。若者たちは定年になり、結婚もしない。親の家に住み、年老いた親を介護する者もいるが、昼間は介護施設におまかせする。夕方コンビニに食料を求める、コンビニは欠くことの出来ぬ存在となり、老人になると、歩くこと、荷物を持つこと、なにもかにもが不自由になる。せめて、介護施設の利用をせず、家で暮らそうと自分に気合いを掛ける。

六角橋は大学の町

伊藤美枝

六角橋の地はその昔東海道神奈川宿へ向う街道の拠点として位置を占めていました。六角橋祐天地蔵尊は江戸時代中期名僧祐天上人の名を冠して先祖が疫病除けとし、また子育てに御利益があると信仰されてきました。また大学の町として栄えてきました。神奈川大学があります。神奈川大学の前身は昭和三年横浜学院として発足し翌年に横浜専門学校となり、昭和二十四年神奈川大学となり現在に至っております。所在地は横浜市神奈川区六角橋三丁目二十七番地、生徒数は大学院生をまぜ一万八千人です。法律、経済が専門のせいか男子生徒が多い、課外活動は八十公認位の数があり、主なものに水泳、レスリング、陸上短距離、長距

離と分かれ、長距離に駅伝部がある。駅伝部は箱根駅伝に平成九年優勝する快挙があります。二度目の優勝を信じ練習に励んでいる課外活動の目玉の一つでもある。また三年前にはみなとみらいキャンパスも出来て発展を遂げています。こちらは六角橋キャンパスと違い女子生徒が多いとの事。六角橋には古くから学生向けの下宿屋がありました。今では学生向けアパートでも風呂、手洗い、台所等完備されてなければ借り手がない。また地元との協賛で催し物も行われたり、学食を大学生と共に食べられる事も出来ます。私も一度友と食しに行き結構美味しく食べてきました。このように六角橋は大学の町、学生の町として発展を遂げました。

青春

何時限の授業に出るのか六角橋大学生の集団に逢う

化粧する子しない子取りまぜて青春なんだ大学生を謳歌している

ふと思えば美容室の多かりき男子学生ゆるくパーマ等して

床屋がわりに男子学生良く行きぬカット専門と名をうつ店

男子二人仲良く町を歩いている馴染の深い町歩くように

駆足で坂降りてくる四、五人のリックゆさゆさ揺れているかな

白楽駅降りて途中に過去在りし書店をほめる人のありて

東横線白楽駅で降りてきて学生達は三三五五に飲食店多く見られる六角橋学生の胃袋満す行列

私の暮らす南林間

半澤敏子



> 9 日吉の森庭園美術館（横浜市港北区）



> 10 神奈川大学（横浜市神奈川区）



> 11 マンション群と富士山（秦野市）

武蔵野市吉祥寺より、夫と共にここ大和市南林間に移り住んで六十四年の歳月が過ぎた。当時は雑木林と点在する芝畑の緑が美しく、商店の有る二条通り迄の徒歩十分に、擦れちがう人に逢うこともない程、住む人は少なかった。早春、辛夷の白い花が咲き桜も咲き始めると、目白や四十雀達の囀りが続き、五月には杉の林から、カッコーカッコーと爽やかな声が聞こえてきた。チューリップの咲く頃、幼稚園の遠足は近くの農林省の試験園で、我児達もお世話になった。

大和市は、昭和四年に大野から片瀬江の島まで、江の島線の開通により発展してきたといわれている。町田市、相模原市、座間市、海老名市、綾瀬市、藤沢市、横浜市（瀬谷区）と、七つの市に囲まれており、南林

間も、西へ歩けば座間市で、当然人の出入りも多く、発展に拍車がかかったと思われる。

現在は、芝の需要が減ると同時に、芝畑は宅地化され、雑木林もマンションや大型商店に変貌している。郭公の鳴いていた杉林は、広い駐車場の有る介護マンションが建ち、もう郭公の声を聞くことはない。

農林省の跡地は、水害を防ぐ為の巨大水槽のある防災拠点地変わった。

公園や、旧家の庭園には今も、榎や辛夷の大きき木が枝を広げ、山桜や河津桜も毎春花を咲かせて、「神奈川の軽井沢」と言われていた往時を偲ばせてくれる。南林間駅から西へのびる中央通りを中心に、東西南北と基盤目に通る道には、風が吹き抜けてゆく。この心地好さだけは、今も変わらない。

五十余年齢重ねし桜木の緑なす苔鈍く光れり

冬の陽を満身に受け柚子の実の黄金の光道に明るむ

百合愛する友への文に書き足しぬ百合の芽九本のびてきました

園児らの吹くシャボン玉虹の色篠懸の木に吸いこまれゆく

四ツ目垣に昼顔咲かす家有ればポストへの道遠廻りする

扇風機音無く廻り十一人無言で並ぶワクチン待つ部屋

柚子金柑山椒枳殻刺有るも蝶の子育つを御存知ですか

六十年育てし黒薔薇剪定す薔薇も老いたり我も老いたり

米寿とて市より贈られし羊羹は九十三才の夫とお三時に

湘南ではないけれど

大沢優子

私の車のナンバープレートを見て「なぜ伊勢原が湘南ナンバーなの？」と非難がましく言う人がいる。湘南と言うお洒落な響きにはそぐわないイメージが、わが伊勢原にはあるのだろう。確かに、と自分でも思わないでもない。海に向け開けていないので、マリンスポーツの輝かしさには遠い。山の町と見えるのだろう。だが大山に守られて、夏涼しく、冬は雪が少ない。江戸時代には大山参りが大流行し、帰途は江ノ島に遊んだと言う。湘南と繋がりはあった。

街は大山の登山口だが、私が楽しみにしているのは、毎年十月初旬に、阿夫利神社境内で催される「火祭薪能」である。三〇〇年前に始まったと言うが、四十年ほど前に復活され、多くの人を集めている。能と言えば、幽玄と決まり文句のように結ばれるのはどうかと思うが、山の夜が冷えて、篝火に照らし出される女面はぞくつとする美しさだ。観世宗家の演ずる能は、格式高く古典の世界を堪能できるのだが、一番心待ちにしているのは、山本東次郎師の狂言である。その軽やかさと力強さは昭和十二年生まれと聞けば、驚嘆すべき芸域である。

昨令和四年は「蚊相撲」で、初見の演目だったが、とても楽しかった。人間に化けた蚊が、思い切り人の血を吸おうと上京してくる。相撲取りを召し抱えたかった大名は、この男の面接をかねて、相撲を取ることになる。最初、長い吸い口をつけた蚊力士に血を吸われた大名は、ふらふらになるのだが、相手が蚊だと気付くと、風を送り蚊を土俵の外へ押し出してしまふ。蚊の付けるのはひよつとこに似た嘯^{うてふ}の面。吸い口は紙を巻いて作る手作りだそう。どうしたら考え付

くのかと思うような奇抜なストーリーだ。

勝つ者に負くる時きて人と蚊と競ひあひつつ舞台明るむ

はたはたと薄絹の袖はためかせ蚊力士敗くれば存分にわらふ

誰もたれもつねなる烏滯を生きをると今宵の神も糸らきてあらむ

蚊も人もひとしなみの者となすやさしき奇想もこの世にありけり

最後は「やるまいぞやるまいぞ」で終わるのだが、かつて捕まった者の話を知らない。追う者も追われる者も橋掛かりの向こうの俗塵の中に紛れゆく。町角で出会うような、登場人物がとても愛おしい。

野原の記憶

古谷 円

四半世紀前、息子が一歳になったときに、秦野市に住まいを得た。そこは野原なども残る丘の上で、三つのマンション群が建ち、学校、医院、スーパーが揃っていた。似たような家族がたくさんいて、公園に行くと子供と母たちが遊んでいた。

丘は盆地の南のへりとなる渋沢丘陵で、出かけるたびに建物のあいだからちらちらと丹沢や富士、箱根の外輪山が見えた。雪をかぶると山々が大きく迫り、春は霞にけぶり、夕日に稜線がくつきりとする山々にいつも新鮮な感覚を味わった。

引越して初めての秋にはこんな歌を詠んだ。

返された帽子のへりに住むごとし秦野盆地の祭り

をのぞく

秦野にはたばこ祭という秋祭がある。すでにたばこ栽培は行われておらず、火まつりとなって続けられている。まだ地域になじめず、参加することもなくその灯を眺め、祭ばやしを聞いていただけであった。

丘の野原は戸建て用の造成地だったが、子供たちと土筆やヨモギをつみ、水たまりのお玉杓子をすくい、すすきの銀の波をかきわけた。母親たちも、子とおなじように運動靴やサンダルの形に足が日に焼けていた。

転がりつつ角伸ばしあう金平糖幼子は聞かずおしゃべりしあう

かぶと虫とりに行きたる大夕焼け長長し母の時間というは

この丘では俳優の山田涼介や岸井ゆきの、舞台俳優の清水優譲が育ち、丘の高校には吉田栄作も通った。吉田は若いときには、秦野には刺激を与えるものはないと憎むほどだったそうだが、今年の祭にはゲストとして出演していた。ここで育った子供たちはかがやくために都会へ出てゆくほかないのだが、山々の光景や野原でたづぷり遊んだ記憶が心を支えているのではないかと、そつと考える。

わが三階の部屋からは江の島や横浜のランドマークタワーが遥かに見えている。丘の街は子供が巣立つて老いゆくばかりと思つたが、ベビーカーを押す新しい住民も増えてなかなかぎやかなのである。

マンション群に霞たちこめ蕾めく千の家族が一部屋ずつ浮く

補足資料 暮らしの町の歴史

高橋みずほ

私たちの暮らしの町の土深く、暮らしを営みつないできた人々や町の姿があります。土に刻んだ暮らしの跡や文字に残った出来事、伝承を拾い集めてみました。

▼人間の暮らしのはじまり

横浜には、約二万年～二万五千年前ごろには人々が暮らしていたようです。関東ローム層の立川ローム層からナイフ形石器などが発見された旧石器時代の矢指谷遺跡は旭区矢指町にあり、ここでは縄文時代の竪穴建物跡や落し穴なども発見されています。縄文時代には狩猟方法として落し穴が盛んに作られていました。

都筑区富士見が丘にあった三の丸遺跡は、縄文時代の広場を中心に土壇墓群と周囲に居住域が同心円状に作られた環状集落です。鶴見川、早渕川に挟まれた丘陵地の台地の上、標高約六十メートルにありました。

同区大柵西の大塚・歳勝土遺跡は、弥生時代の集落跡で濠が廻った環濠集落とその外に方形周溝墓群があり、敵や獣から村を守る形態をしています。百人ほどの人々が暮らし、炭化米やモモの種子も出土しています。弥生時代の大規模な環濠集落が完全な形で発掘された珍しい遺跡です。

青葉区市ケ尾町の朝光寺原遺跡は、弥生時代の環濠集落を中心とし、古墳群など含む港北地域を代表する貴重な遺跡でしたが、港北ニュータウンの開発に伴い、三の丸遺跡同様に消滅、住宅街などに造成されています。

残された遺跡も消滅した遺跡も、現在私たちが暮らす地上に確かにあった人の生活の場です。その確

さの上に私たちの暮らしがあります。

▼武蔵国と相模国

『日本書紀』安閑天皇元年（五三四年）、武蔵国造の笠原直使主と同族の小杵は、国造の地位を争い幾年も決着がつかず、小杵は密かに上毛野君小熊に援けを求め、使主を殺そうとした。使主はそれに気づき京に上り事情を報告し、朝廷は使主を国造とし、小杵を誅殺した。使主はかしこみかつ喜んで、謹んで天皇のために横渟、橘花、多氷、倉櫟、四処の屯倉を設置した。……

これは、横浜にかかわる地名、橘花（橘樹郡）、倉櫟（久良郡、久良岐郡）が見える最古の記録です。笠原は和名抄では武蔵国埼玉郡笠原郷ですが不確定で、また屯倉も次のあたりとされています。

横渟屯倉…武蔵国横見郡（埼玉県比企郡吉見村、東村山市北部）

橘花屯倉…武蔵国橘樹郡御宅郷（神奈川県川崎市住吉、横浜市日吉付近）

多氷屯倉…武蔵国多摩郡

倉櫟屯倉…武蔵国久良（久良岐）郡（横浜市）

律令制が敷かれ、現在の横浜の市域には武蔵国橘樹郡（川崎市のほぼ全域と横浜市北東部）、久良岐郡（横浜市中南東部）、都筑郡（横浜市北西部）、相模国鎌倉郡（横浜市南西部及び鎌倉市）がおかれます。

横浜市は武蔵国と相模国にまたがり、多く武蔵国に属します。武蔵国は埼玉県の一部を除く全域、東京都二十三区と多摩地域、川崎市、横浜市の西南部を除く地域です。相模国は川崎市を除き、横浜市の西南部と神奈川県全域です。

武蔵国や相模国は、横浜市で結ばれています。移動する境界線は人を分けつつないでゆきます。

▼防人の歌

武蔵国・相模国から遠い壱岐対馬、筑紫の諸国へ防人が徴兵されました。東国の防人の多くは難波津に集められ、舟で大宰府に送られて各地に向かい、軍務に従事しながら開墾し食糧を自給しました。任務は三年で延長もありました。

『万葉集』二十巻は防人の歌が最も多く、都筑郡、荏原郡の名が見える最古の記録でもあります。

わが行きの息衝くしかば足柄の峰延ほ雲を見とと
偲はね
都筑郡の上丁服部於田

わが背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあや
にかも寝も
妻服部若女

白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた
見てももや
主帳荏原郡の物部歳徳

草枕旅行く夫なが丸寝せば家なるわれは紐解かず
寝む
妻標椅部刀自賣

▼白雉の話

『続日本紀』神護景雲二年（七六八年）六月二十一日 武蔵国橘樹郡の人、飛鳥部吉志五百国は同国の久良郡で白雉を捕え献上した。称徳天皇は群卿に下して審議させ、色が白いは朝廷の尊い光が天下を照り渡すしるしで、捕えられた国が武蔵とは武を用いず文を尊ぶことの幸いを表わし、郡が久良とは天子の寿命が永く延びることを明らかにしているなどと奏してきた。永くこの良き徴を伝えるためには人民に恩恵を施すべきとし、武蔵国の天平神護二年以前の正税未納分をみな免除、久良郡の今年の田租の三分の一を免除、また武蔵国司と久良郡司にそれぞれ位一階を進め、五百国には従八位下を授け、絶十足・真綿二十屯・麻布四十端・正税（稲）

千束を与えた。……

——白雉を捕えた久良郡の場所とは、横浜市金沢区富岡の鳥海^{くつもと}丘との伝承もあるようです。また富岡の名は、この地の長者が狩りで白雉を得たので帝に献上し、白雉の霊を慰めるために塚を作り、「鳥見ヶ丘」と呼び、「富岡」「留岡」となったという話も残っています。

▼鷹狩の話

鷹狩の最も古い記録は『日本書紀』仁徳天皇四十三年（三五五年）。河内国から珍しい鳥が献上され、百濟から渡来した酒君^{さけのきみ}はそれを俱知^{くち}（鷹）と呼び、馴らせば人に従い諸鳥を掠^とるという。酒君に授け養わせ、百舌鳥野に行幸して狩獵した時に鷹を放ち数十の雉を獲^えられたので鷹甘部^{たかひべ}を定めた。鷹を養う所を鷹甘邑^{たかひ}と言う。……

大伴家持、在原業平など鷹狩の愛好者や名手は多く、また戦国武将太田道灌には鷹狩にまつわる山吹の里伝説があります。鷹狩で俄雨に降られ、農家で蓑を借りたいと申し出ると娘から山吹の花を差し出され、道灌は怒って帰ると、古老に「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞ悲しき」の蓑と「実の」をかけ、貧乏で蓑一つも無いことを山吹に喩えたと教えられ、その後歌道に精進し、文武両道の武将になりました。

都筑郡の村々は一七一六年に留場（鷹場）に、十日市場村は捉飼場^{とらつかいば}にも指定（一七三九年に解除）され、農民による鳥の殺生は一切禁止。「江戸より十里（約四十キロ）の間、鳥おどし申さざる様」とお触書が出され、一七三七年十一月、十二月には武蔵国都筑郡、久良岐郡、橘樹郡、相模国三浦、鎌倉、高座の三郡に雉を捕らないようお触書が出ます。ときに農民は池や

沼や小川での魚も殺生を禁じられ、冬に鳥が餌を取りやすいよう水田の水を落し、案山子を早々に取り除くよう命じられました。鉄砲も所持できず鹿や猪から畑を守るなど苦労が絶えなかったようです。

▼二ヶ領用水

多摩川の氾濫が多く、稲毛領、川崎領の二ヶ領にまたがり造られた農業用水です。徳川家康の家臣小泉次大夫が流域農民の協力を得ながら十数年かけて全長約三十二キロを一六一一年に完成、水路が張り巡らされて米の生産量は飛躍的に伸びました。家光が鷹狩の時にその米を賞味し、以来將軍家の御飯料になります。後に野毛米と呼ばれ、江戸で寿司飯として人気になりました。

明治時代には果物栽培にも利用され、大正初期に梨畑が広がり、長十郎の発祥の地でもあります。

▼煙草の葉

一六〇一年にスペインの宣教師が家康に煙草の種と煙草を原料に加えた葉を献上し、それから煙草栽培や喫煙の風習が広まります。「波多野たばこ」は一六五〇年ごろに商品化されます。一七〇七年富士山の噴火で荒れた土地に葉煙草の栽培を奨励し、秦野葉は薩摩、水府と三大銘葉となり、味が軽く吉原の遊女が一日中吸っても喉を痛めないといわれ、品質のよい国府（薩摩）の葉に秦野葉を加えて口当たりがよくになりました。

秦野市大住郡の農家に生まれた前田夕暮の歌には、葉を梁に吊るす乾燥方法「木枯らし」が見られます。

おのが寝る部屋の上にも煙草の葉青青とつり安寝すらしも

▼茶屋の話

生麦北町の熊茶屋五右衛門は月の輪熊の芸達者な牝熊を、生麦の忠左衛門は白い月の輪熊を客寄せに繋ぎします。一八二六年シーボルトが長崎、江戸の往復で二頭を見て「江戸参府紀行」などに記しています。寛政年間に珍しい鳥や獣を見せ物にする「花鳥茶屋」（動物園の先駆け）が江戸、大阪、名古屋などにでき、江戸では下谷広徳寺門前のものが有名でした。

シーボルトが熊茶屋で見た十三日後に熊が死亡。名主から戒名「馴余変猛牝熊胎子」をつけてもらい、翌日の法事には線香代金五十文が届きました。白熊は一八二八年に急に暴れたため殺されます。白熊茶屋の跡地に葬られて白熊神社として碑が建てられ、今も香華が手向けられているそうです。

——私たちが暮らす町角深く、驚きや喜び、悲しみが人々の暮らしに寄り添いながら、人が人に連なる歴史が流れてきました。私たちが言葉に刻んだ町角もその流れに息づき始めています。

*参考文献

- ・『日本書紀（上）』『同（下）』（中央公論新社、二〇二〇年）
- ・『日本書紀（三）』（岩波書店、二〇〇三年）
- ・『萬葉集四 日本古典文学体系7』（岩波書店、一九八八年）
- ・『続日本紀（中）』（講談社、二〇一三年）
- ・小川信訓『富岡抄誌』（富岡青少年の家図書部、一九六六年）
- ・『都筑文化1』（緑区郷土史研究会、一九八〇年）
- ・このほかに、神奈川県、川崎市、横浜市、秦野市などのホームページを参考にしている。

編集 後記

今回は、全会員参加の企画です。第一二四号と第一二五号の二回に分けて掲載することにいたします。

この企画は、第一二三号の特集2「暮らす町角」において、そこに暮らしている方だからこそ知る町を、会員八名（森藍火、三枝むつみ、荻谷君代、平賀富美子、武田素晴、清水あかね、松崎英司、渋谷香代子）に執筆していただきました。単なる町の紹介ではなく、個々の眼差しで描いた町が力強く生きていることを知ることができるもので、とても好評でした。

そこで他の会員にも同じテーマで町を描いてもらうことで、新しい土地が見えてくるのではないかと話し合い、今回の企画につながりました。

現在の会員数は八十六名ですので二回に分け、地図上では北北東から南南西の線をほぼ境にし、北側を今回のメンバーとしました。埼玉県（川口市）、東京都（北区、台東区、練馬区、目黒区、大田区）、横浜市北部（港北区、都筑区、青葉区、鶴見区、神奈川区）、神奈川県（大和市、伊勢原市、秦野市）の地域です。それぞれに味わい深い町が描かれ、読

み応えのあるものとなっています。

今、生きている町がどのような土地の歴史に根差しているか、土地にかかわる史実や伝承を補足資料として集めています。

また横浜市は高度経済成長を背景にして自然豊かな地域の乱開発を防ぐために、一九六五年に港北ニュータウン計画が横浜市六大事業（みなとみらい地区開発・造成、市営地下鉄の建設、横浜ベイブリッジの建設など）の一つとして発表され、開発が進められました。現在新しい住みよい町並みが生まれています。が、そ

こには、縄文、弥生時代など人々の暮らしの痕跡もあり、遺跡の保存と開発のせめぎ合いがあったようです。太古の人と人が暮らしを共にし始め選んだ場所に、現代人が暮らしを求めたことも、土地のもつ豊かさなのかもしれません。

今回書いていただいた方々のエッセイが新たな町並みの発見となり、貴重な資料となりましたこと、心から感謝申し上げます。

〔M・T〕

横浜歌人会会報第一二四号

発行日 二〇二三年十二月二十四日

編集人 高橋みずほ

発行人 桜井 健司

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.coocan.jp/>

制作 アトリエ云 <http://a-un.art.coocan.jp/>

印刷 啓文社 <https://www.keibunya.co.jp/>

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。

[写真]

> 1 ほか 高橋みずほ > 3 間ルリ > 4 大橋 弘
> 6 桜井健司 > 7 鹿取未放 > 11 古谷 円